

東日本大震災と結びつけられた甲子園の物語

大橋, 充典
久留米大学人間健康学部

<https://doi.org/10.15017/4372020>

出版情報 : 健康科学. 43, pp.105-115, 2021-03-25. 九州大学健康科学編集委員会
バージョン :
権利関係 :



— 原 著 —

東日本大震災と結びつけられた甲子園の物語

大橋充典 *

Media narratives of *Kōshien* and the 3.11 earthquake disaster

Mitsunori OHHASHI *

Abstract

On March 11, 2011, a 9.0-magnitude earthquake hit eastern Japan. The earthquake caused 40-meter-high waves that swept over coastal towns. Amid much criticism, high school baseball tournaments occurred five months later (the Summer *Kōshien* Competition). Some studies have demonstrated the meanings and possible division that exist between sports narratives and reality in the Japanese media after 3/11. While the media consist of many different modes of communication, online media is characterized as interactive. The purpose of the present study is to clarify the narrative structure of a sports blog. The present study examined how a sports blog created a narrative relationship with a disaster, using content analysis and comparing the narrative structure of online and newspaper contexts. The analysis reveals that the narrative structure of the *Sportnavi plus* blogs, which differs from that of the editorial accounts in the newspaper *Asahi Shimbun*, features no direct mention of the incidents in the immediate aftermath of the disaster.

Key Words: newspaper, editorial, blog, sport, baseball

(Journal of Health Science, Kyushu University, 43: 105-115, 2021)

問題の所在

1990年代までのメディア・スポーツ研究の多くは、欧米を中心に新聞やテレビなどのマス・メディアを主要コンテンツとして、メディア・メッセージの制作、内容、および受け手のカテゴリーに分類されて検討されてきたが、日本におけるメディア・スポーツ研究の蓄積は量・質ともに不十分であることが指摘されてきた¹⁾。2000年代以降、関連研究が徐々に蓄積されるようになってきているが、未だ多くの研究対象が国内外の大規模スポーツイベントに限定されていること、またオンラインメディアに関する研究の不足などが指摘されている²⁾。

メディア・スポーツ研究における発展の過程として、Wenner³⁾は、1970年代から1990年代までを幼年期 (Mediasport 1.0) および青年期 (Mediasport 2.0) とし、2000年代中頃までを成人早期 (Mediasport 3.0)、それ以降を中年期 (Mediasport 4.0) として区分している。特に、Mediasport 3.0 から 4.0 の時期においては、メディア・スポーツ研究の理論的枠組みや研究方法が多様化したという。たとえばウェブメディアの世界に関して、Web 1.0 の時代区分においては、主にウェブサイトの製作者によって発信された情報を「読む」ことに限定されていたユーザーが、Web 2.0 ではウェブサイトの閲覧者であっても「書き込む」ことが可能になったことで、ネットワーク上での相互作用が生み出された。さらに Web 3.0 では、ウェブページにメタデータを付与することで、コンピュータ自身が意味情報を解釈する。つまり、これによって単なる文字列の情報に意味が付与され、単語間の関係をコンピュータ自身が推定できる。そのため、ユーザーは検索窓にキーワードを並べるだけで、必要な情報を手に入れることができるのである⁴⁾。

ところで、2019年時点での日本におけるインターネット利用状況⁵⁾は、過去一年間での利用者の割合がおおよそ90%を占めており、毎日最低でも一回は利用しているという利用者の割合はおおよそ80%であった。また、インターネットの利用目的については、電子メールの送受信 (65.2%) と情報検索 (64.2%) が最も高い割合を示していた。こうした結果によって、近年のメディア研究におけるオンラインメディアに関する情報の重要性を示しているといえる。

インターネットにおけるスポーツの情報は、競技団体やチームの所有する公式のウェブサイトからのみ発信されるとは限らない。たとえば、ニュースや情報、あるいはスポンサー企業のウェブサイト、また無数のフ

ァンによって情報が発信される。その上、マス・メディアの情報を受け身で消費する参加形態と比較すると、より高水準での参加が含まれるため、結果としてメーリングリストやグループだけでなく、掲示板などが参加者たちによって作られるようになっている⁶⁾。

本研究の位置づけと目的

マス・メディアが報道機関という組織によって固有の意志をもつことに対し、オンラインメディアの特徴は、一次情報の欠如によって生じるデマや風評、あるいは誹謗中傷や炎上などといった情報の妥当性に関する問題が残されてはいるものの、単なる「場」として存在していることによって、明確な言論の立ち位置や意志が存在しないことにある⁷⁾。そのため、オンラインメディアにおける言説を分析することは、所属組織によって生じる偏りを排除し言説を再検討することが可能だと考えられる。

オンラインメディアにおけるスポーツの言説を分析対象とした研究に関して、たとえば Dart⁸⁾は、2006年のFIFAワールドカップドイツ大会に関するブログについて、無所属のワールドカップファンブログ、既存のサッカーサイト内のワールドカップファンブログ、メディア (BBC) が運営するワールドカップブログ、そしてスポンサー (Coca Cola) 運営のワールドカップブログの4つに分類して検討を行い、新たなメディア・スポーツ研究の可能性を見出している。また MacKay and Dallaire⁹⁾は、女性スケートボーダーたちのブログ記事の分析をとおして、主要メディアへの抵抗を明らかにしており、Norman¹⁰⁾は、アイスホッケーに関するブログ記事について、バーチャルエスノグラフィー^{注1)}を用いて分析し、オンラインメディアにおけるファン文化の特徴およびカナダにおけるアイスホッケーの文化的意義を検討している。さらに、Norman et al.¹¹⁾は、NHLのファンによるブログ記事の分析、およびブロガーへのインタビュー調査によって、ホームスタジアムの移転に伴う政治的な活動に抵抗する手段としてブログを活用していたことを明らかにしている。加えて、Merrill et al.¹²⁾は、ある女性レポーターがNFLの取材中に選手からハラスメントを受けたという報道^{注2)}に対して、ブログ記事およびインタビュー調査の内容から、男性からの性的な眼差しがいかにしてレポーターとしての彼女に関する批判的言説を生み出しているのかを明らかにしている。

上記のように、オンラインメディアを主な分析対象

とした研究は、国外を中心に散見されるようになってきているものの、国内においてはあまり進められていない状況である。そこで本稿では、オンラインメディアにおけるスポーツの言説に着目し、ブログに掲載された2011年の全国高等学校野球選手権大会（以下、甲子園野球大会）に関する記事について、物語論を用いて分析し、オンラインメディアにおいてみられる震災報道への言説の内容を明らかにすることを目的とした。具体的には、新聞およびブログにおける甲子園野球大会に関する言説について、ジャン・アダンの物語論を参考に分析し、その後、新聞およびブログの記事の比較によって、オンラインメディアにおける言説の特徴について検討する。

方法

分析枠組み

2011年3月11日14時46分頃、三陸沖の宮城県牡鹿半島の東南東130km付近で発生したマグニチュード9.0の地震は、日本国内での観測史上最大規模だとされており、また福島県、岩手県、宮城県において7mから14m以上、遡上高では最大40.5mの津波が確認された。茨城県、千葉県、東京都、埼玉県、神奈川県の間東地域では、広範囲にわたって液状化現象が発生し、水道や電気、ガスなどのライフラインの一時的停止にも見舞われた。発生から3ヶ月ほど経過した同年6月時点でのデータによれば、死者は15,467名、負傷者は5,388名、行方不明者は7,482名、避難者は124,594名とされている¹³⁾。

その後、夏の電力事情に懸念が高まる中、高校野球連盟および朝日新聞社主催のもと、甲子園野球大会は例年通り開催されることになった。甲子園野球大会は、当時は全国中等学校野球大会であった1915年当初より、朝日新聞社の主催によって成り立っている。そのため、朝日新聞の社説からは開催を決定した主催者としての、ポジティブな言説が見られることが想定される。一方で、ブログ記事には、主催者の権力から分離された市民メディアとして独自の言説が表出されるのか、あるいは、開催決定に至るポジティブな言説に影響を受けるのかについては検討の余地がある。

震災とスポーツに関する先行研究については、たとえば1995年に生じた阪神・淡路大震災とオリックス・ブルーウェーブにまつわる物語について、ファンによる被災経験とのズレが検討された研究¹⁴⁾や、東日本大震災からの「復興五輪」として2020年の東京五輪招致

を国益として強調した政府と、それを報じたメディア言説について検討された研究¹⁵⁾、また2020年の東京五輪・パラリンピックの招致決定を報じたニュース、報道番組、およびワイドショーの分析によって、招致決定を喜ぶ「われわれ」と、それを否定する「他者」との関係について、東日本大震災との関連から検討された研究¹⁶⁾などがある。

また、スポーツにおける物語について検討している阿部¹⁷⁾によれば、2002年のソルトレイク五輪は、9・11に直面したアメリカにとっての、テロと闘うアメリカのナショナリズムを発露し、国民を一致団結させる大会であったという。さらに阿部は、1996年のアトランタ五輪の女子マラソンの物語を取り上げ、有森・浅利・真木による日本選手内のメダル争いというローカルな物語から、五輪で銅メダルを獲得した有森というナショナルな物語への語りのシフトについて、「ローカルな対立がナショナルな統合へと吸収された」と説明する。

アダン¹⁸⁾によれば、『物語』があると言えるためには、少なくとも一つの事件の表象が必要であり、それらがメディアや記者、作家、広告、映画などによって報告され語られるとき、出来事は物語になるという。物語の構成要素はAからFの6項目に分類されており、A、B、およびCに関しては、時間的経過に伴い主体を規定する存在、所有、行為の述語と関係づけられるとし、また、D、E、およびFに関しては、一全体としての単一行為（筋）の統合として、因果を秩序づけ、同時に把握し、教訓を加えると説明されている。

本稿では、アダンが定義した上記6つの構成要素を参考に、朝日新聞の社説およびブログにおける東日本大震災と甲子園野球大会の物語の構造について検討する。

- A. 諸事件の継起：事件が突発する時間的展開
- B. テーマの単一性：演技者としての主体の存在
- C. 変換される述語：主体を関連づける述語
- D. 事行：一全体を形成する単一行為（筋）の統合
- E. 物語の因果関係：継起および結果の関連
- F. 評価（教訓）：要素連続に組織的意味を与える最終的評価

データ収集

2011年8月1日から31日までの期間（同年、夏の甲子園野球大会の開催期間は8月6日から20日）に、朝

日新聞社が掲載した社説、および *Sportsnavi* が運営するブログサイトである *Sportsnavi plus* (以下、*スポナビ+*) に投稿されたブログ記事^{註3}を対象として収集した。*スポナビ+*は利用上、いやがらせや悪口といった有害な内容の掲載は禁止されており、*スポナビ+*のアカウント、あるいは *Yahoo!JAPAN* のアカウントを所持していないと投稿はもちろん、投稿された記事へのコメントも行うことができない。そのため、悪質な書き込みや意味をなさない文章の羅列による炎上などが生じにくく、一定の秩序が保持されていると判断できる。

結果

社説に描かれる大会の意義

朝日新聞社は、2011年8月1日から31日までの期間において、甲子園野球大会と震災に関する社説を二度掲載している。表1には、開催日の翌日にあたる8月7日に掲載された社説記事、また表2には閉会した翌日の8月21日に掲載された社説記事が示されているが、文ごとに段落番号が付与されている。

アダンは、事件の順序と語りの時間的秩序にしばしば捻れ(時間的断絶)を生じさせる新聞記事について、ジェラルド・ジュネットの示した「物語内容」(語られる物語内容:事件の時間的因果と継起)と「物語」(語る物語:テキスト上での順序)を参考に分類し、図式化することによって、明解な分析方法を提示している。前者は、事件や出来事の順序、後者はテキスト上での順序として2つの時間軸上に示される。

図1には、縦軸に記事内で取り上げられた出来事の時間的展開(t_1, t_2, \dots)、また横軸に段落ごとのテキスト(表1参照)が示されており、表1に示された甲子園大会開幕に関する社説記事について、「語られる物語」と「語る物語」における過去から未来への展開が提示されている(黒点:テキストによって時点が特定できた部分、白点:時点が特定できなかった部分)。さらに表3には、上述したアダンによる6つの物語の構成要素を図1において示された時間的展開とともに示されており、それらに対応する社説記事でのテキストが例として示されている。同様に、図2には、甲子園閉幕に関する社説記事の時間的展開、表4には、物語の構成要素と時間的展開、および社説記事でのテキストの例が示されている。

図1および図2に関して、物語の時間的展開とともに検討してみると、甲子園大会開幕の物語においては、物語の前半から震災発生当時の状況に触れながら、甲

子園大会の開幕の意義について語られており、また物語の半ばでは、再度震災発生当時の状況について、ここでは大会出場を目指す選手たちが直面した状況(困難)に触れながら、甲子園大会の開幕、そして大会に臨む選手たちへ向けたメッセージが示されている。震災を経験した選手たちはプレーができることに幸せを感じ、支援によってプレーできることに感謝している。また、そうしたプレーはわれわれ視聴者の心に響くものであるからこそ見届けたい、という大会開始後の出来事に言及し、締め括られている。

一方で、甲子園大会閉幕の物語に関しては、終盤において、被災した選手が甲子園大会の予選での敗退後、高校卒業後の世界に向けた一步を踏み出すという展開の中で、震災発生当時について言及されているものの、全体的には甲子園大会が無事閉幕を迎えた時点以降に焦点が当てられている。例えば、表3および表4の「解決」のテキストについて比較してみると、開幕の物語には「救われた」や「ありがたさを感じている」のはプレーをする選手(あるいは関係する当事者たち)である一方で、閉幕の物語に示されている「クレームが減った」、「観客が・・・人になった」、「累計・・・人を記録した」などは、大会主催者が主体として捉えられる。つまり、甲子園開幕の物語では、行為主体としては選手が中心に物語られているが、甲子園閉幕の物語においては、大会に出場した当事者たちよりも、大会が成功裡に閉幕したことに主眼が置かれているのである。

ブログに描かれる大会成功と歓喜

ブログにおいても甲子園大会の開幕と閉幕に言及している記事をそれぞれ取り上げ、分析を試みた。表5および表6には、社説記事と同様に、甲子園野球大会開幕および閉幕に関するブログ記事がまとめられている。また、物語の構造に基づいて分類し図式化した内容は、図3および図4に示されており、さらに表7および表8に、時間的展開とともにテキストの例が示されている。

図3および図4の内容から、ブログ記事においては、震災発生当時の状況に言及した内容は確認できなかったものの、震災の影響はあったものの大会を開催できたことに対するポジティブな内容、また開始時間の変更などを余儀なくされたにもかかわらず、観客の増員も相まって大会は無事成功したことへの喜びが強

調されている。ブログ記事においては、電力消費を意識した変則的な試合時間に対して、選手のコンディション調整の問題が取り上げられ、翌年以降の課題とされてきた。メディアが作り上げる震災と大会開催の物語に対する抵抗の言説については確認できなかった。

表1 甲子園大会開幕に関する社説

1. 今年も甲子園の夏がやって来た。
2. 第93回全国高校野球選手権大会の代表49校のドラマを、最後まで見届けたい。
3. 地方大会を見ると、開催すら危ぶまれた東日本に限らず、震災の影響が全国に及んでいることを改めて思い知らされた。
4. 家族や親類が津波の犠牲になり、家を流された選手がいた。
5. 転校してプレーを続けた選手もいれば、野球そのものを断念した選手もいた。
6. 福島第一原発近くの3校は、連合チームをつくって福島大会に出場した。
7. 被災したチームを練習試合に招き、野球用具を被災校に送る取り組みが全国に広がった。
8. 地方大会に参加できなかった高校生の思いや、多くの人の努力があって迎える甲子園であることをかみしめたい。
9. 被害の大きかった宮城県では地方大会に77校が参加した。
10. 9年ぶりの公立校対決となった決勝で初出場を決めたのは古川工だ。
11. 内陸部の大崎市で津波には遭わなかったが、練習中に震度6強の揺れに見舞われた。
12. 選手は地面に座り込んだ。
13. すぐ脇で照明灯1基が倒れ、地割れが走った。
14. 春の県大会は中止に。
15. 夏の開催もはっきりせず、「なんで野球なんてしているのか」と選手が自分でわからなくなった時期もあったという。
16. 練習を約1カ月中断し、ボランティア活動に通った。
17. 「一緒にがんばろう」という被災者の言葉にどれほど救われたか。今野晴貴（はるき）主将が振り返っている。
18. 困難をハンディにするか奮い立たせる力にするか。それは自分次第だ。
19. サッカーの日本女子代表（なでしこジャパン）が見せてくれたとおりで。
20. でも、甲子園に集った選手たちは期待や重圧を背負い込みすぎず、ただ勝利を目指して力をふるってほしい。
21. 学校によっては、被災地代表といった過度の期待や注目を集めるかもしれない。
22. 地方大会では「震災を言い訳にはいけない。注目されて負けてはいけない」と入れ込んで肩を痛めた投手がいた。
23. ある監督は「震災を切り捨てることはできない。でも、震災のことをいろいろ聞かれてもつらい部分がある」と漏らした。
24. 余分な力を抜いて野球に集中すればいい。
25. 震災を経て、多くの選手が野球を楽しむ幸せ、支えられてプレーできるありがたさを感じている。
26. 震災後の特別な夏だが、2011年の君の夏は一度きりだ。
27. 特別なことは必要ない。
28. 君のプレーが応援に応えるものであり、その姿は人の心に響く。
29. さあ、それぞれの甲子園を思い切り楽しもう。

表2 甲子園大会閉幕に関する社説

1. 全国4014チームの戦いが幕を閉じた。
2. 東日本大震災から5カ月。
3. それぞれの思いとともに迎えた93回目の全国高校野球選手権は、「あの夏の」と長く語られる記憶の一つとして人々の心に残ってゆくだろう。
4. 延長戦は大会最多タイ記録に達する八つを数えた。
5. 1点差で決着したのは16試合あり、サヨナラ試合は七つ。
6. 「最後まであきらめない」という選手たちの言葉をいつにも増して聞いた。
7. 連日、入場券売り場に長い列ができた。
8. その観客に変化があった。
9. 高野連によると「応援する学校の試合に間に合わない」といったクレームが例年に比べて大きく減った。
10. 目当てのチームの試合というより、高校野球そのものを楽しもうという人がふえたのか。
11. 震災後のどこか重苦しい空気のなかで、いちずな熱気に触れたいと引きつけるものがあったのだろう。
12. 観客は15日間で84万8千人になった。昨年を上回る。
13. 終戦記念日には、09年の球場改装後で最多となる累計8万2千人を記録した。
14. その「甲子園でプレーできる喜びがスタミナの源だった」。
15. 優勝した日大三（西東京）の吉永健太郎投手が言った。
16. 準優勝した光星学院は被災地・青森県八戸市からの出場だった。
17. 頂点に立てた選手たち以外にもこの夏の野球を楽しみ、力を得てくれたらどうか。
18. 宮城大会で優秀選手に選ばれた仙台商3年の菅田（すがた）直幸君は、高校で野球をやめると決めた。
19. 県代表にあと少しの準決勝で敗れた後は就職活動に取り組む。自動車学校にも通う。
20. いまだに悔しくて、自分の試合の録画はもちろん、甲子園のテレビ中継もほとんど見なかった。
21. 3月11日、母親の実家が津波で流され、伯父を亡くした。
22. 交通機関が止まり、自転車で1時間半かけて学校に通った。
23. 「野球と震災は別物。一生懸命プレーするしかない」と言い聞かせて、甲子園を目指した。
24. 打てない苦しさや練習のつらさに比べればほかのことは、と今でも思える。
25. 「震災を経験した中で野球をやれたことは大きな自信になる。負けた悔しさをどこで返せばいいのか悩んだけど、負けて今の自分があるというOBの話を聞いて、野球で返さなくてもいいのかなと思えた。これからの人生で返せばいいと」。
26. 近い将来、育った仙台市若林区の少年チームで野球を教えたい。
27. 地元の復興にも携わるつもりだ。
28. 甲子園の夏は終わった。
29. 若者たちは、それぞれに次に進む場所で力を伸ばすに違いない。

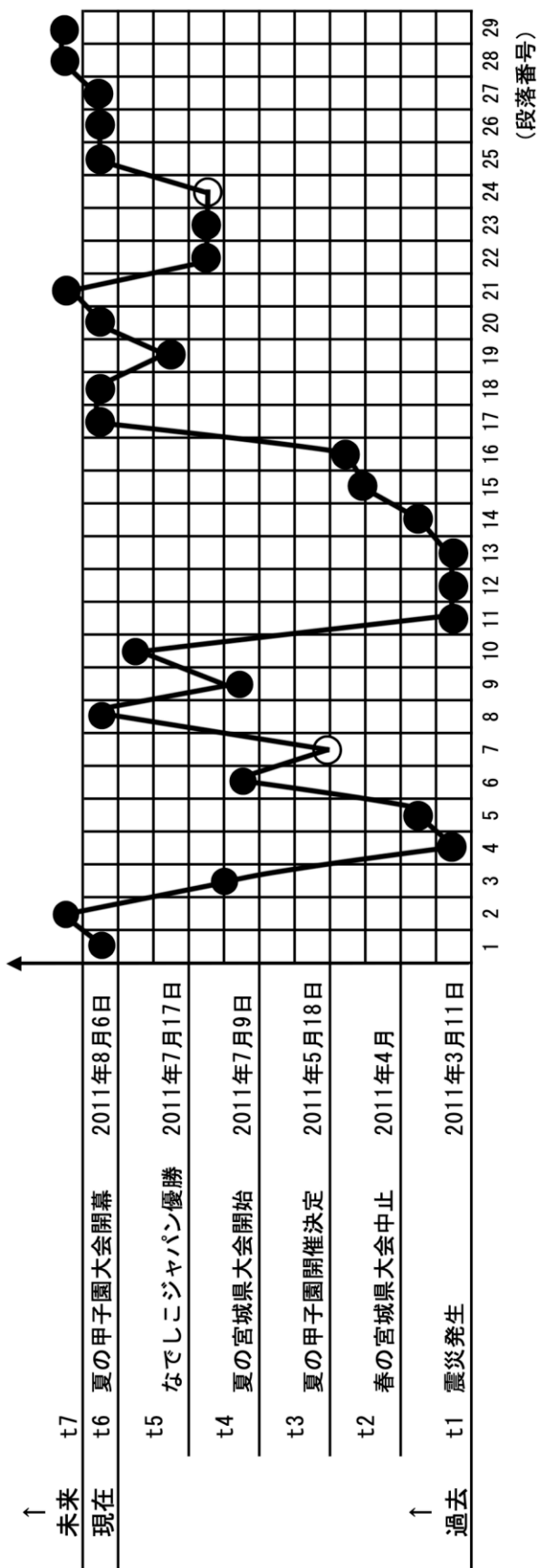


図1 社説における2011年夏の甲子園開幕の物語の図式

アダン (2004) を参考に作成

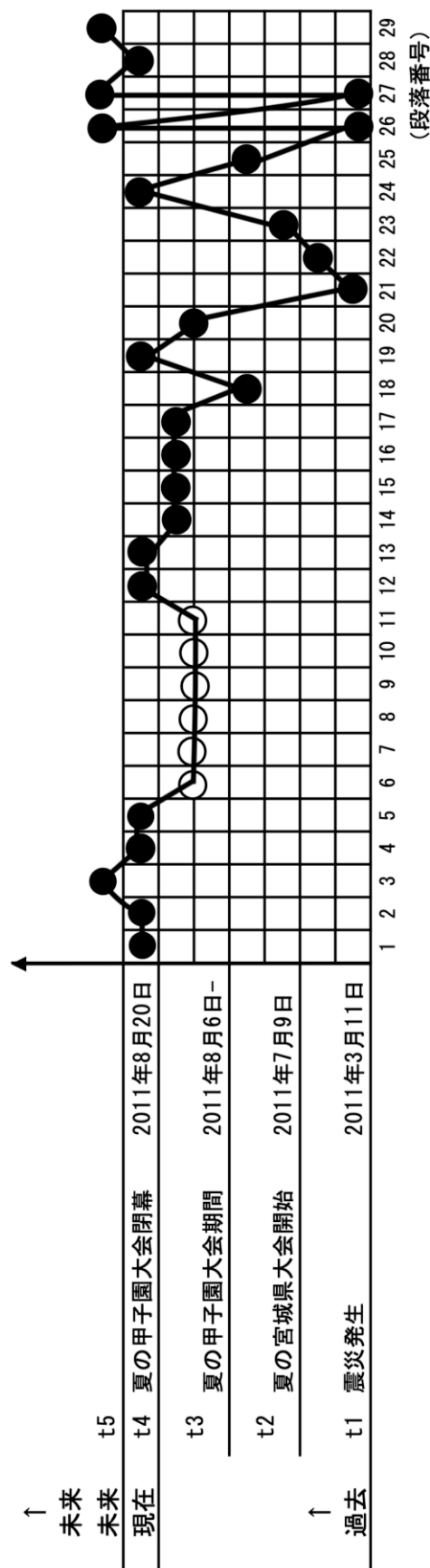


図2 社説における2011年夏の甲子園閉幕の物語の図式

アダン (2004) を参考に作成

表3 社説における2011年夏の甲子園開幕のテキスト

命題 (Pn)	時間的展開	行為
Pn1		
方向付け	t1	「・・・震度6強の揺れに見舞われた。」
Pn2		
紛糾	t2-t5	「・・・津波の犠牲になり、家を流された選手がいた。」 「・・・プレーを続けた選手もいれば、・・・断念した選手もいた。」 「『なんで野球をしているのか』・・・わからなくなった時期もあった・・・。」
Pn3		
行為	t2-t5	「・・・ボランティア活動に通った。」 「・・・連合チームをつくって・・・出場した。」 「・・・被災したチームを練習試合に招き、野球用具を被災校に送る取り組みが全国に広がった。」 「・・・入れ込んで肩を痛めた投手がいた」 「ある監督は・・・『震災のことをいろいろ聞かれてもつらい部分がある』と漏らした。」
Pn4		
解決→結果	t6	「『一緒にがんばろう』という被災者の言葉にどれほど救われたか。」 「震災を経て、多くの選手が野球を楽しむ幸せ、支えられてプレーできるありがたさを感じている。」
Pn5		
結末→展望	t7	「・・・ただ勝利を目指して力をふるってほしい。」 「・・・最後まで見届けたい。」 「・・・それぞれの甲子園を思い切り楽しもう。」

アダン (2004) を参考に作成

表4 社説における2011年夏の甲子園開幕のテキスト

命題 (Pn)	時間的展開	行為
Pn1		
方向付け	t1	「3月11日、・・・」
Pn2		
紛糾	t1-t2	「交通機関が止まり、自転車で1時間半かけて学校に通った。」 「『練習と震災は別物。一生懸命プレーするしかない』と言い聞かせて、甲子園を目指した。」
Pn3		
行為	t2-t3	「・・・高校で野球をやめると決めた。」 「・・・敗れた後は就職活動に取り組む。自動車学校にも通う。」 「・・・甲子園のテレビ中継もほとんど見なかった。」 「その『甲子園でプレーできる喜びがスタミナの源だった』。・・・被災地・・・からの出場だった。」
Pn4		
解決→結果	t4	「・・・この夏の野球を楽しみ、力を得てくれただろうか。」 「・・・クレームが例年に比べて大きく減った。」 「観客は15日間で84万8千人になった。昨年を4千人上回る。」 「終戦記念日には、・・・累計8万2千人を記録した。」
Pn5		
結末→展望	t5	「『震災を経験した中で野球をやれたことは大きな自信になる。・・・』」 「・・・『あの夏の』と長く語られる記憶の一つとして人々の心に残ってゆくだろう。」 「若者たちは、それぞれに次に進む場所を力を出さずに違いない。」

アダン (2004) を参考に作成

表5 甲子園大会開幕に関するブログ

1. 試合のことを語る前に、一人の人間として記しておくことがある。
2. 開会式のあいさつや選手宣誓でも言及されていたが、
3. このたびの震災で亡くなった方のご冥福を祈るとともに、野球をすることの許される平和というものに感謝したいと思う。
4. 高田高校に優勝盾が渡されたり、気仙沼向洋の選手が始球式をしたりするのを見ると、
5. 今年の大会が例年と同じように開催されることは本当に凄いことだし、素晴らしいことなのだと思うにはいられなかった。
6. このような状況でも一生懸命プレーする選手諸君の姿を、今年も出来る限り追っていこうと思う。
(省略)

投稿者A, 投稿日2011年8月6日

表6 甲子園大会閉幕に関するブログ

1. 震災による様々な影響のため、変則的な開始時間で開催された大会が成功裏に閉幕した。
2. 試合開始時刻を早めたことにより、点灯試合が少なくなったようだ。
3. しかしそのぶんだけ選手に早起きを強いることになり、コンディションの調整に苦慮するチームもあったようだ。
4. これは来年に向けての検討課題だろう。
5. しかしながら、延長戦や劇的な試合が多かったせいか、昨年とほぼ同数の観衆が球場へ足を運んだとの数字もある。
6. 諸事情あって準決勝と決勝戦は現場へ足を運ぶことができなかったが、大きな問題が発生することもなく予定どおりに日程が消化されたことを嬉しく思う。
(省略)

投稿者A, 投稿日2011年8月21日



図3 ブログにおける2011年夏の甲子園開幕の物語の図式
アダン (2004) を参考に作成



図4 ブログにおける2011年夏の甲子園開幕の物語の図式
アダン (2004) を参考に作成

表7 ブログにおける2011年夏の甲子園開幕のテキスト

命題 (Pn)	時間的展開	行為
Pn1		
方向付け	t0	
Pn2		「このたびの震災で・・・」
紛糾	t0-t1	「このような状況・・・」
Pn3	t1	「・・・選手が始球式をしたり・・・」
行為	t1-t2	「・・・素晴らしいことなのだと思いますにはいられなかった。」
Pn4		
解決→結果	t2	「・・・、一人の人間として記しておくことがある。」
Pn5		「・・・を祈るとともに、・・・感謝したいと思う。」
結末→展望	t3	「・・・今年も出来る限り追っていこうと思う。」

アダン (2004) を参考に作成

表8 ブログにおける2011年夏の甲子園閉幕のテキスト

命題 (Pn)	時間的展開	行為
Pn1		
方向付け	t0	
Pn2		「・・・試合開始時刻を早めた・・・」
紛糾	t1	「・・・コンディションの調整に苦慮するチームもあったようだ。」 「・・・昨年とほぼ同数の観客が球場へ足を運んだ・・・」
Pn3		「・・・、点灯試合が空になったようだ。」
行為	t2	「・・・成功裏に閉幕した。」
Pn4		
解決→結果	t3	「・・・嬉しく思う。」
Pn5		
結末→展望	t4	「・・・検討課題だろう。」

アダン (2004) を参考に作成

まとめにかえて

本稿では、アダンの物語論を参考に、朝日新聞における社説記事およびスポナビ+に投稿されたブログ記事について分析し、震災と結び付けられて開催された甲子園野球大会の物語について検討した。

朝日新聞の社説に描かれた甲子園野球大会開幕の物語には、東日本大震災に見舞われた選手や関係者たちの苦難と葛藤を乗り越えて、野球を楽しむ幸せを感じ、感謝している。そのプレーはわれわれ視聴者の心に響くものであり、甲子園を楽しんでほしい、というメッセージが込められていた。そこには、震災の発生とその状況について、繰り返し言及しながら、その困難さが強調されている一方で、そこから再起し、大会に参加していくことへの期待が窺える。

また、甲子園野球大会閉幕の物語には、震災発生時の状況に繰り返し触れられることはなく、むしろ、そこからいかにして甲子園大会が成功裡に閉幕を迎えられたのかが強調されていた。震災直後の大会の特殊性が語られながらも、観客数が増加したこと、累計数が過去最高を記録したこと、さらにはクレームの減少など、大会成功に関する言説が確認された。一方で、被災の悲しみを乗り越えて大会出場を目指した選手が、敗退後、将来に向けて歩んでいく姿が描かれることで、選手たちの希望と成長の物語に結び付けられている。甲子園大会閉幕の物語には、「試練」→「悲しみ／苦しみ」→「希望」→「再生／新たな旅立ち」といった構造¹⁹⁾が描かれていたといえる。

2011年の甲子園大会は、被災した選手たちにとっても、それを見るわれわれ視聴者にとっても、日常と切り離された特別な行事²⁰⁾として機能していた。それは、東北という「ローカル」なチームの試合が、震災を受けた日本全体への「ナショナル」な物語として受け入れられていくものとして捉えられている。

一方で、ブログにおける物語については、震災発生時の状況には直接言及されず、被災者への弔いおよび大会開催への感嘆、また平和への感謝などの震災と大会開催が結び付けられた自身の想いが記述されていた。そこには、新聞において描かれた甲子園野球大会の開幕から閉幕に至る成功の物語をポジティブに受け入れ、大会が無事に終えられたことに対する喜びが綴られていたといえる。オンラインメディアにおける情報は、報道機関であるマス・メディアの情報とは性質が異なり、明確な意思を持たないこと、また描くべき物語は投稿者自身に委ねられていることにある。しかしなが

ら、本稿で分析対象としたブログ記事に関しては、社説記事と比較して、物語の図式に若干の違いは見られたものの、内容に独自の物語が描かれていたとはいえ、社説記事の内容を強く受け入れた内容であった。これは、先行研究において示された抵抗の言説とは異なり、むしろ肯定の言説が示されていたといえる。一つには、分析対象としたスポナビ+への投稿は、多くの投稿者がスポーツに対し、愛好的な姿勢であり、また大会開催を心待ちにしていた可能性が非常に高い。そのため、今後の研究にはスポーツに対するより幅広い思考が反映された言説を選定すること、また、分析対象とした新聞記事に関しても、他社あるいは他の誌面の内容を検討する必要がある。

附記

本研究は、JSPS 科学研究費(若手研究 (B) 16K21542)の助成を受けて行われた。

注

- 1) Norman はバーチャルエスノグラフィーについて Christine Hine (2008) を参考に、長期の文化的参入、参与観察、漸進的なデータ収集および分析としている。
- 2) 報道では、メキシコのTV Aztecaに所属する Ines Sainz という女性レポーターが、New York Jets の所属選手へのインタビュー中に不快な発言を受けたとされている。
- 3) スポナビ+は、Sportnavi が運営するスポーツに関するブログがまとめられたプラットフォームである。投稿される記事は、スポーツの種目ごとに分けられており、本稿の資料については、「高校野球」にカテゴリ化された記事の中から、期間を設定し、収集を行った。スポナビ+は、Yahoo!JAPAN のスポーツカテゴリからアクセスすることが可能であることから、一般的なブログと比較して多くのアクセス数を見込むことができる。しかしながら、2018年1月31日時点で、Sportsnavi はスポナビ+のサービスを終了している。

引用文献

- 1) 山本教人 (2000) : 国内外におけるメディア・スポーツ研究の動向と今後の課題. 九州体育・スポーツ学研究, 14(1), 1-10.
- 2) 大橋充典・西村秀樹 (2020) : 日本におけるメディア・スポーツのパースペクティブ. 健康科学, 42,

- 47-55.
- 3) Wenner, L. A. (2015): Sport and Media. In: Giulianotti, R (eds) Routledge handbook of the sociology of sport. Routledge: New York, pp. 377-387.
 - 4) Aghaei, S., Nematbakhshi, A, Mohammad., and Farsani, K, Hadi. (2012): Evolution of the World Wide Web: From Web 1.0 to Web 4.0, International Journal of Web & Semantic Tehnology, 13(1): 1-10.
 - 5) 総務省 (2019) : 通信利用動向調査報告書 (世帯編) https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/pdf/H201900_001.pdf (参照日 2020年12月15日)
 - 6) Crawford, G. (2004): Consuming Sport: Fans, sport and culture. Routledge: New York.
 - 7) 佐々木俊尚 (2014) : ネットの言論空間形成. 川上量生監修. ネットが生んだ文化 誰もが表現者の時代. 角川学芸出版, pp. 79-109.
 - 8) Dart, J. (2009): Blogging the 2006 FIFA World Cup Finals. Sociology of Sport Journal, 26(1), 106-126.
 - 9) MacKay, S. and Dallaire, C. (2012): Skirtboarder net-a-narratives: Young women creating their own skateboarding (re) presentations, International Review for the Sociology of Sport, 48 (2): 171-195.
 - 10) Norman, M (2014): Online Community or Electronic Tribe? Exploring the Social Characteristics and Spatial Production of an Internet Hockey Fan Culture, Journal of Sport and Social Issues, 38(5): 395-414.
 - 11) Norman, M., Ventresca, M., Szto, C. and Darnell, C. (2015): Driving to the "Net": Blogs, Frames, and Politics in the New York Islanders' Stadium Saga, Journal of Sport and Social Issues, 39(1): 19-39.
 - 12) Merrill, K., Bryant, A., Dolan, E. and Chang, S. (2015): The Male Gaze and Online Sports Punditry: Reactions to the Ines Sainz Controversy on the Sports Blogosphere, Journal of Sport and Social Issues, 39(1): 40-60.
 - 13) 内閣府: 防災情報のページ. 特集 東日本大震災. http://www.bousai.go.jp/kohou/kouhoubousai/h23/63/spespec_01.html (参照日 2021年1月30日)
 - 14) 高橋豪仁 (2000) : 新聞における阪神淡路大震災に関連づけられたオリックス・ブルーウェーブ優勝の物語とあるオリックス・ファンの個人的体験. スポーツ社会学研究 8, 60-72.
 - 15) 山田健太 (2015) : 東日本大震災・オリンピック・メディア—国益と言論. マス・コミュニケーション研究 86, 39-62.
 - 16) 水出幸輝 (2016) : 2020年東京オリンピック・パラリンピック開催決定と他者—テレビ報道を事例に—. マス・コミュニケーション研究, 24 (1): 79-92.
 - 17) 阿部潔 (2008) : スポーツの魅惑とメディアの誘惑—身体/国家のカルチュラル・スタディーズ. 世界思想社.
 - 18) ジャン＝ミシェル・アダン (2004) : 物語論—プロップからエーコまで. 末松壽・佐藤正年訳. 白水社.
 - 19) 遠藤英樹 (1999) : 〈被災者〉というカテゴリーをめぐるマスメディアの「物語」構造. 岩崎信彦・鶴飼孝造・浦野正樹・辻勝次・似田貝香門・野田隆・山本剛郎編. 阪神・淡路大震災の社会学 第1巻 被災と救援の社会学. 昭和堂, 159-171.
 - 20) ダニエル・ダヤーン・エリユ・カツ (1996) : メディア・イベント 歴史をつくるメディア・セレモニー. 青弓社.